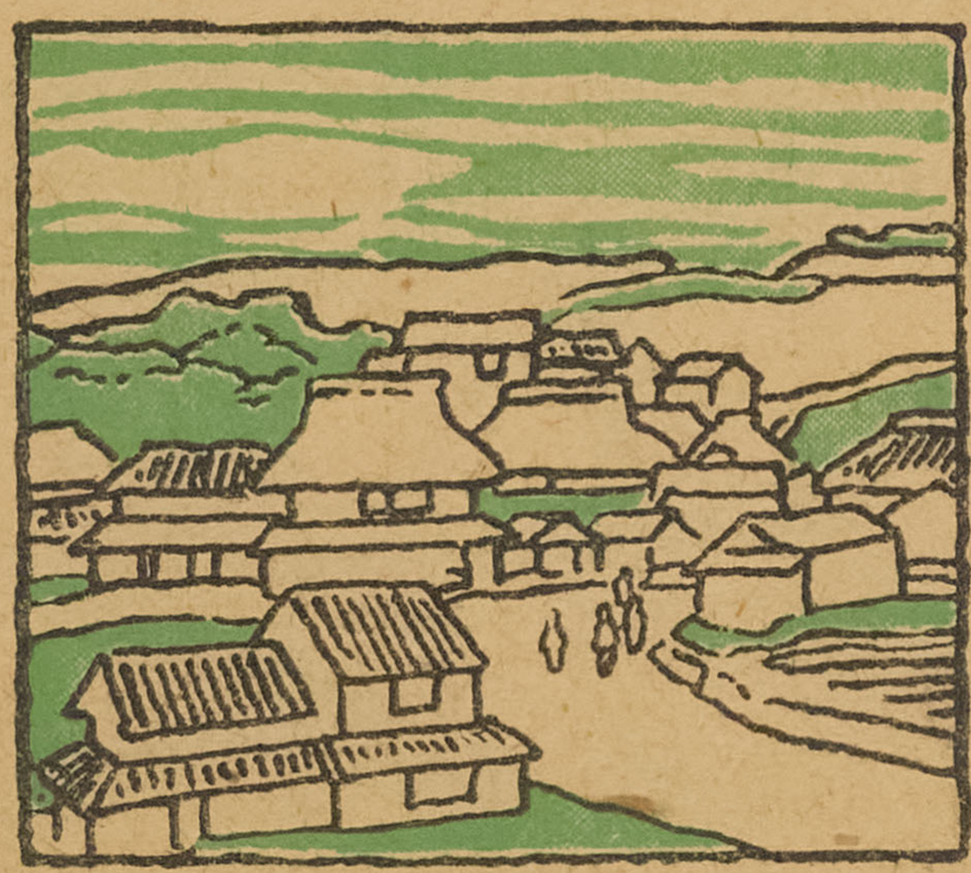
こどもくらぶ

一

国立国語研究所
78468
図書館

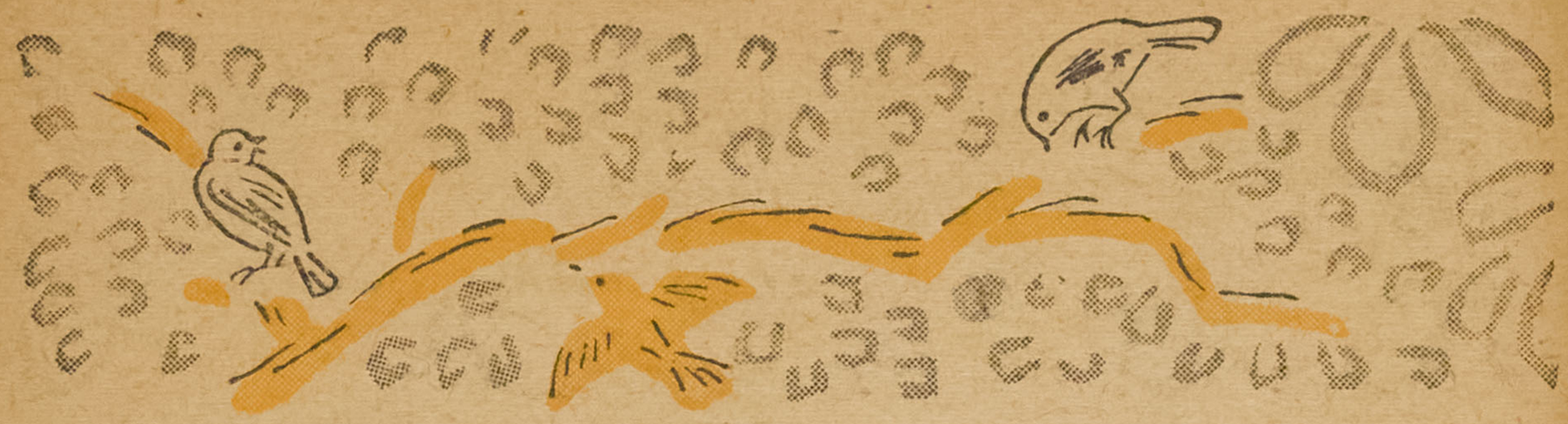
とくご

—



もくろく

一　みんな　いい　こ……四
二　なのはな……六
三　むすんで　ひらいて……八
四　たまいれ……九
五　かくれんぼ……十二
六　もちもの……十四
七　よみかき……十五
八　あさの　こくばん……十七
九　ゆうやけ　こやけ……十八



八　あさの　こくばん……十七
九　ゆうやけ　こやけ……十八
十　ゆうぎ……二十一
十一　あいさつ……二十四
十二　人の　かお……二十七
十三　手と　足……二十九
十四　ひとつの　ことばから……三十一
十五　なって　みたい　もの……三十四
十六　だんだん　くわしく　なる……三十七
十七　山の　つつじ……四十
十八　お月さんの　くに……四十三

一

みんな　いい　こ。

おはなを　かざる、

みんな　いい　こ。

きれいな　ことば、
みんな　いいこ。

なかよし　こよし、
みんな　いいこ。

二　なのはな

なのはな、
なのはな、
まつのき。
なのはな、
なのはな、
しろい　くも。

なのはな、
「おはよう。」
「おはよう。」
なのはな、
なのはな、
なのはな。

しろい　くも。

三　むすんで　ひらいて

むすんで、

ひらいて、

てを　うって、

むすんで、

また　ひらいて、

てを　うって、

その　てを　うえに。

四　たまいれ

しろい　たま、

あかい　たま、

しろい　たま。

あかい　たま、

あかい　たま、

しろい　たま。

「はいった。」

「はいった。

しろい　たま。

「はいった。

「はいった。

あかい　たま。

○

「かごに　はいった　たま」

を　かぞえましょう。

さきに、しろい　たまを

かぞえましょう。」

「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、なな

なつ、やっつ、ここのつ、とお、十一、十二、十三、十

四。

「こんどは、あかい　たまを　かぞえましょう。」

「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、なな

なつ、やっつ、ここのつ、とお、十一、十二、十三、十

四。

「おや、どちらも　おなじでしたね。

もう　一ど　やりましょう。」

五　かくれんぼ

かくれんぼ　するものよっといで。

じゃんけんぽんよ、あいこでしょ。

もういいかい。

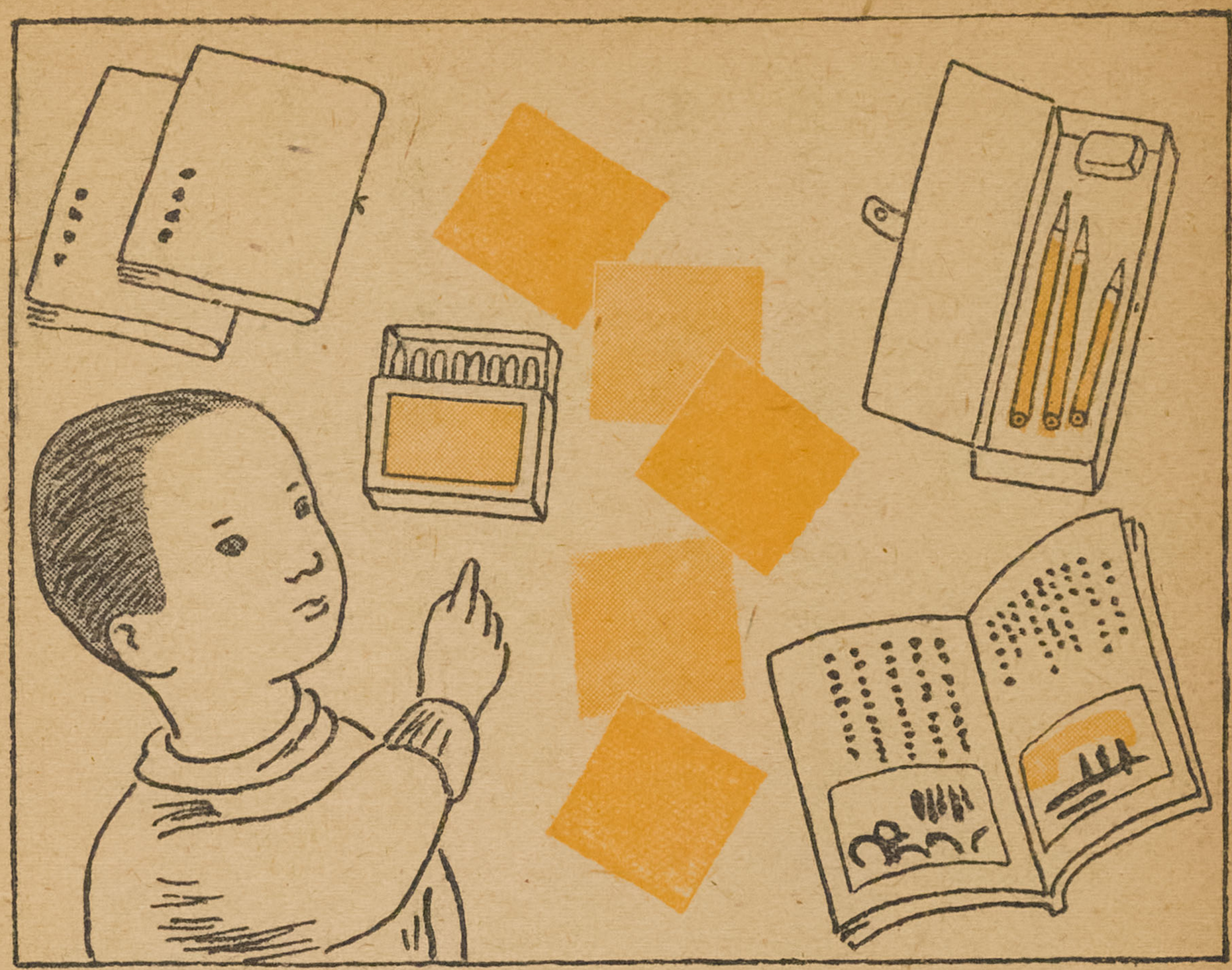
まあだだよ。

もういいかい。

まあだだよ。

もういいかい。

もういいよ。



六　もちもの

わたくしの　もちもの。

ほん　一さつ、

ちょうめん　二さつ、

いろがみ　五まい、

くれよん　ひとはこ、

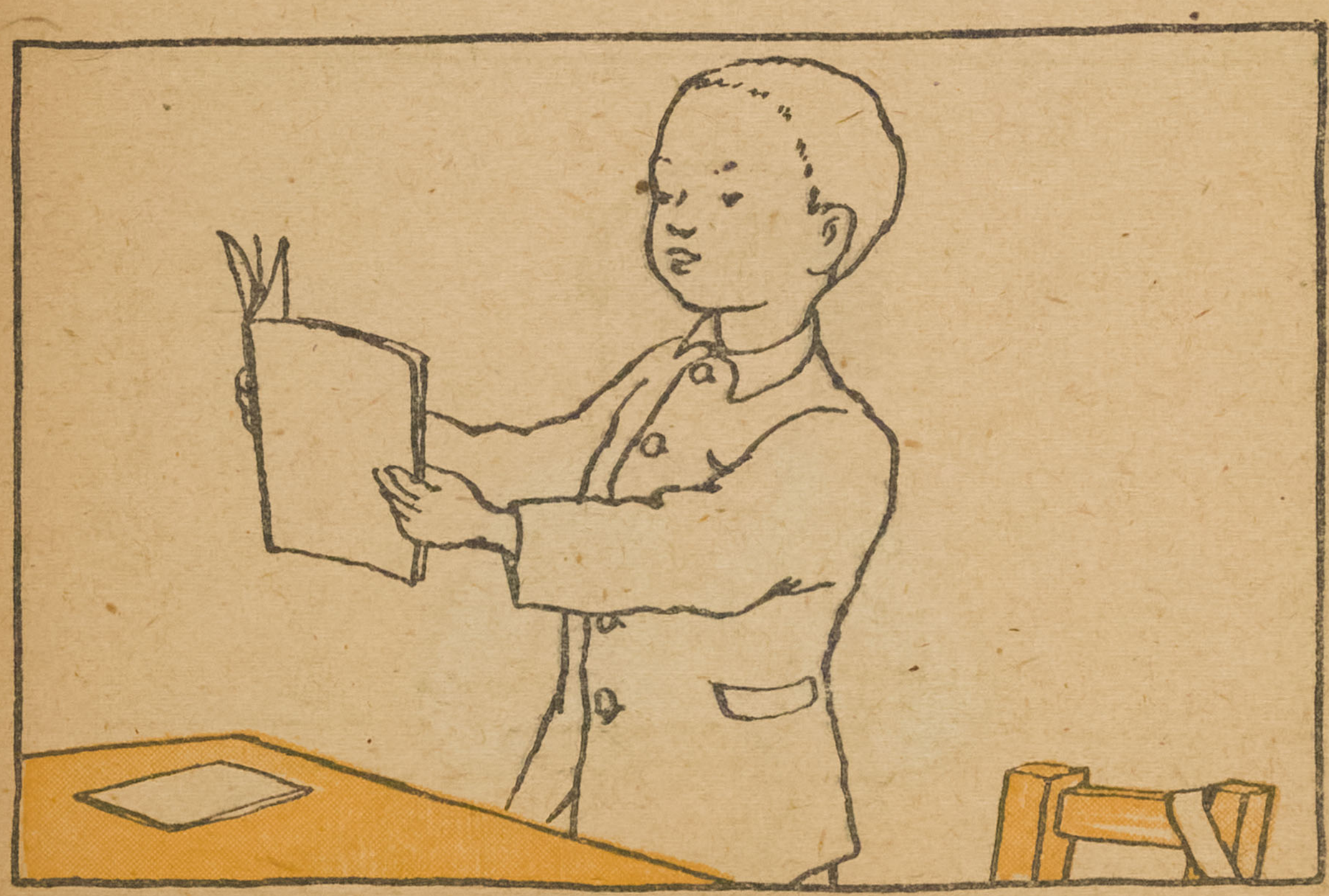
ふでいれ　ひとつ、

えんぴつ　三ぼん、

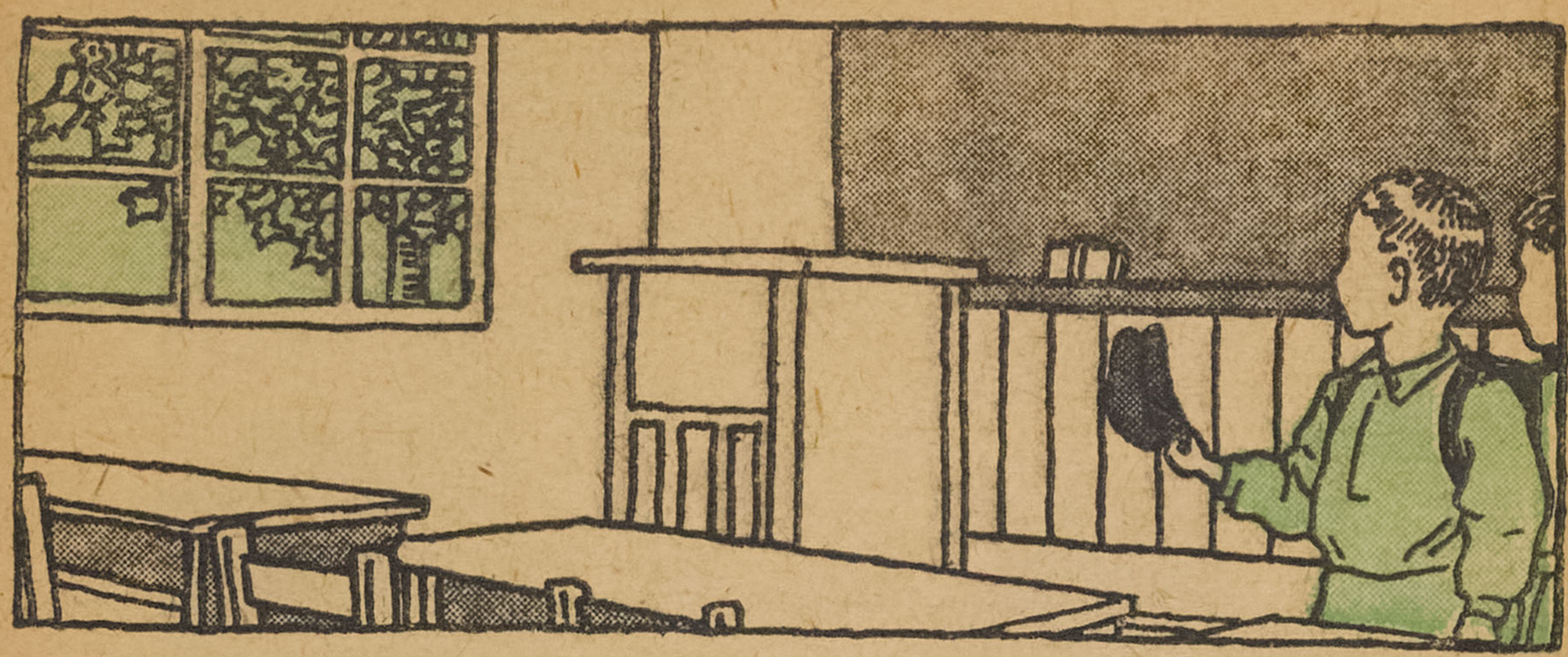
けしごむ　ひとつ。

セ　よみかき

じを　よむ　ときには、
くちを　つかいます。
めも　つかいます。
いきも　つかいます。
こころも　つかいます。



じを　かく　ときには、
てを　つかいます。
えんぴつも　つかいます。
かみも　つかいます。
まだ　あります。
なんでしょう。



八

あさの　こくばん

こくばん　きれいだな。

あさの　はが　うごいてる。

まどの

きょうは、

どんな　えが　かかれるでしょう。

どんな　じが　かかれるでしょう。

だれが　かくでしょう。

だれが　よむでしょう。

せみが　どこかで　なきだした。

九　ゆうやけ　こやけ

ゆうやけ　こやけ。
あした
てんきに　なあれ。

○

うさぎ、うさぎ、
なに　みて　はねる。

十五や　おつきさま
みて　はねる。

○

ひらいた、ひらいた。
なんの　はな　ひらいた。
れんげの　はな　ひらいた。
ひらいたと　おもったら、
みるまに　つぼんだ。

なに　みて　はねる。

つぼんだ、つぼんだ。
なんの　はな　つぼんだ。
れんげの　はな　つぼんだ
つぼんだと　おもったら、
みる　まに　ひらいた。

十　ゆうぎ

「おててつないで、
のみちをいけば、
みんなかわいい
ことりになって、
うたをうたえば、
くつがなる。」

ました。

○

いま、「おてて　つないで」の　うたを　うたいました。

それから、このゆうぎを、みんながかって、うたの　おどりました。

にかんがえて

わたくしは、「おてて　つないで」の　ところで、おともだちと　てを　つなぎました。

「のみちを　いけば」の　ところは、げんきよく　あるき

ました。

「みんな　かわいい　ことりに　なって」の　ところは　こ〃

まりました。そこで、りょうてを　はねのように　うごか〃

しました。

「うたを　うたえば」では、くちに　てを　あてて、らっぱ〃

のように　しました。

「くつが　なる」では、あしぶ〃

みを　しました。

「はれた　おそらに　くつが

なる」では、てを　うえに　さ〃

しあげました。

二ばんの　「はねて　おどれ」

「ぱ」の　ところは、ぴょん　ぴ

ょん　とびました。　ここが

一ばん　おもしろかったと

おもいます。

十一　あいさつ

「こんにちは。」

「こんにちは。」

たねまきする　人、
いえを　たてる　人、
さかなを　とる　人、
きしゃを　はしらせる　人。

「こんばんは。」
「こんばんは。」
「こんばんは。」

一ばんぼし　みつけた。

「こんにちは。」

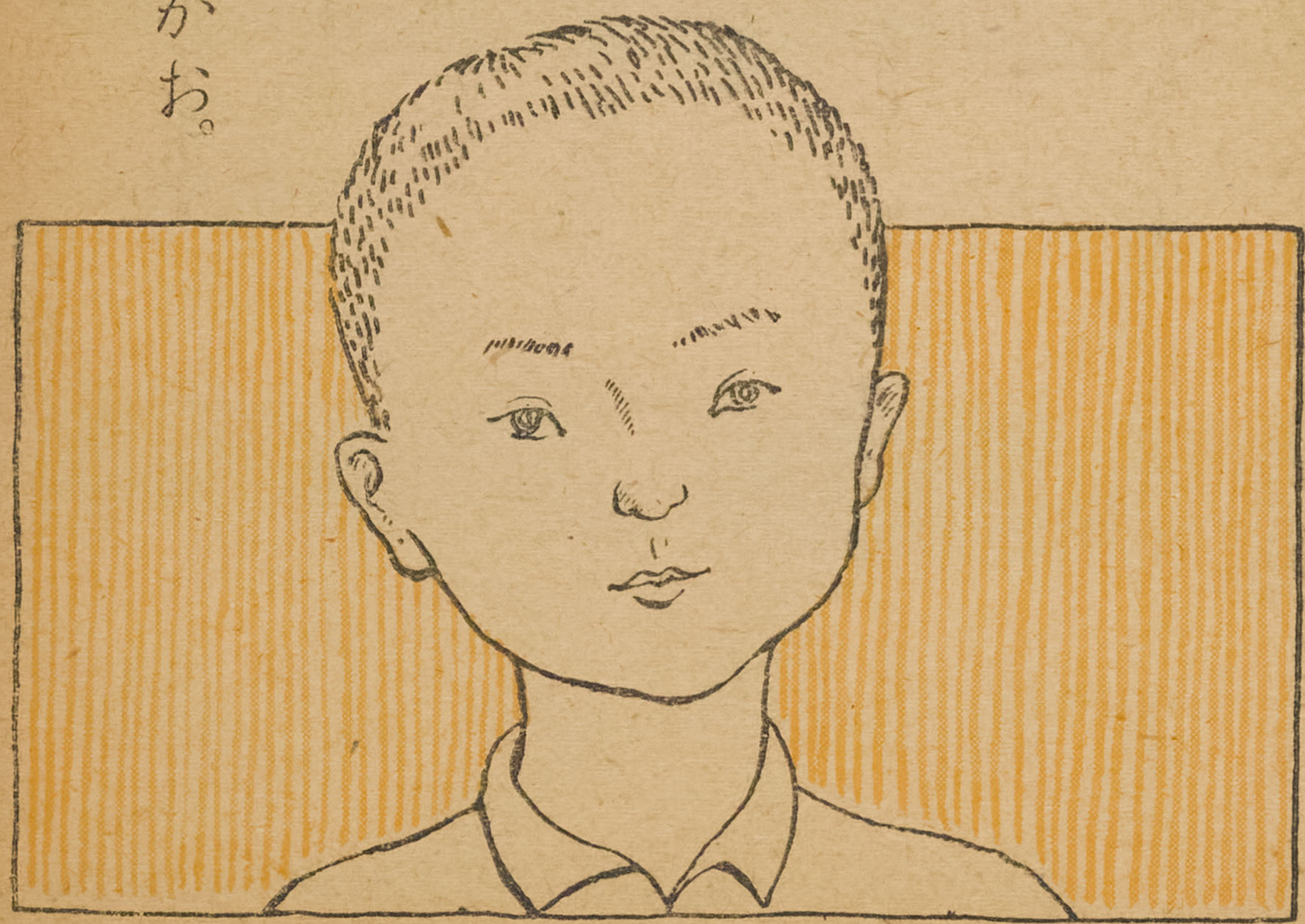
二ばんぼし　みつけた。
こもりうたが　きこえます。

「おやすみなさい。」
「おやすみなさい。」

ことりも　ねむりました。
らじおも　ねむりました。
くさも　きも　ねむりました。

十二　人の　かお

目は　ふたつ、
みみも　ふたつ。
口は　ひとつ、
はなも　ひとつ。
だれも　だれも
おなじ　かお、
だれも　だれも　ちがった　かお。



ひとつの　かおが、
わらったり、
なったり、
おこったり、
よろこんだり、
かんがえたり、
いろいろに　かわります。

○

「げさ、あなたは、その　目で　なにを　みましたか。
「きのう、その　みみで　なにを　ききましたか。

十三　手と足

手は　二ほん、
みぎ　ひだり。
足も　二ほん、
ひだり　みぎ。

手と　なかの　いい　こゝとば。

もつ、にぎる、なげる。

まだ あります。

足と なかの いい こゝ

とば。

たつ、あるく、はしる。

ほかに ありませんか。

この 手で、なにを もゝ

ったでしょう。

この 手で、なにを もつゝ

この　手で、なにを　もつ。
でしょう。

この　足で、どこへ　いっ
たでしょう。
この　足で、どこへ　いく
でしょう。

十四　ひとつの　ことばから

お日さまと　いう　ひとつの　ことばから、

おもいだしたことばを、つぎつぎとかいてみました。

ただおさんのかいたことば。

お日さま――おつきさま――おほしさま――
――くも――かぜ――あめ――ゆき――きた
――みなみ――にし――ひがし――

みちこさんのかいたことば。

お日さま――おかあさん――かがみ――
くし――手ぬぐい――ふきん――おへや――
――なか――そと――

——なか——そと——

まことさんの　かいた　ことば。

お日さま——にじ——あか——あお——

きいろ——まる——四かく——三かく——

よしこさんの　かいた　ことば。

お日さま——はな——ことり——とぶ——

なく——とまる——かくれる——

十五　なって　みたい　もの

「なにでも　なる　ことが　できるなら、　ただおさんは、なにに　なって　みたいと　おもいますか。」

「かぜに　なります。」

「なぜ、　かぜに　なりたいと　おもいますか。」

「かぜに　なって、どこでも　どんどん　ふきまわって　みたい」のです。」

のです。」

「みちこさんは　なにになりますか。」

「わたくしは　はなに　なります。」

「その　わけは。」

「きれいな　はなに　なって、お　へやを　かざりたいからです。」

「まことさんは。」

「うみに　なります。」

「どうして。」

「うみになって、せかいじゅうの　おふねを　うかべたいからです。」

「よしこさんは。」

「ごとりになります。」

「それは　なぜですか。」

「たかい　木に　とまって、うたを　うたいたいからです。」

十六　だんだん　くわしくなる

かぜが　ふきます。

かぜが　そよそよと　ふきます。

あさかぜが、そよそよと　のはらを　ふきます。

川が　ながれて　います。

川が、さらさらと　ながれて　います。

ちいさな　川が、うちの　まえを　さらさら

らと　ながれて　います。

いぬが　はしって　きます。

しろい　いぬが　はしって　きます。

しろい　こいぬが、むこうから

ころげるように　はしって　きます。

あさがおの　はなが　さきました。

あさがおの　はなが　いつつ　さきました。

うすもも　いろの　あさがおの　はなが、いつつ　かきね

あさがおの　はなが　いつつ　さきました。

うすもも　いろの　あさがおの　はなが、いつつ　かきね

に　さきました。

ゆめを　みました。

ゆうべ、おもしろい　ゆめを　みました。

ゆうべ、おとうさんと　きしゃに　のって、お月さんの

ところへ　いった　ゆめを　みました。

十七　山の　つつじ

山の　つつじが　さいた。
まっかな　つつじが　いっぱい。
かっこうが　ないてる。
「かっこう。」
「かっこう。」
つつじから　ないてる。
「かっこう。」
「かっこう。」

○

ほたる。

うちの　なかで　はなした。

でんとうの　したを、

くろく　すうっと　とんだ。

はしらの　かげで、

ぴかり、

ぴかり、

ひかった。

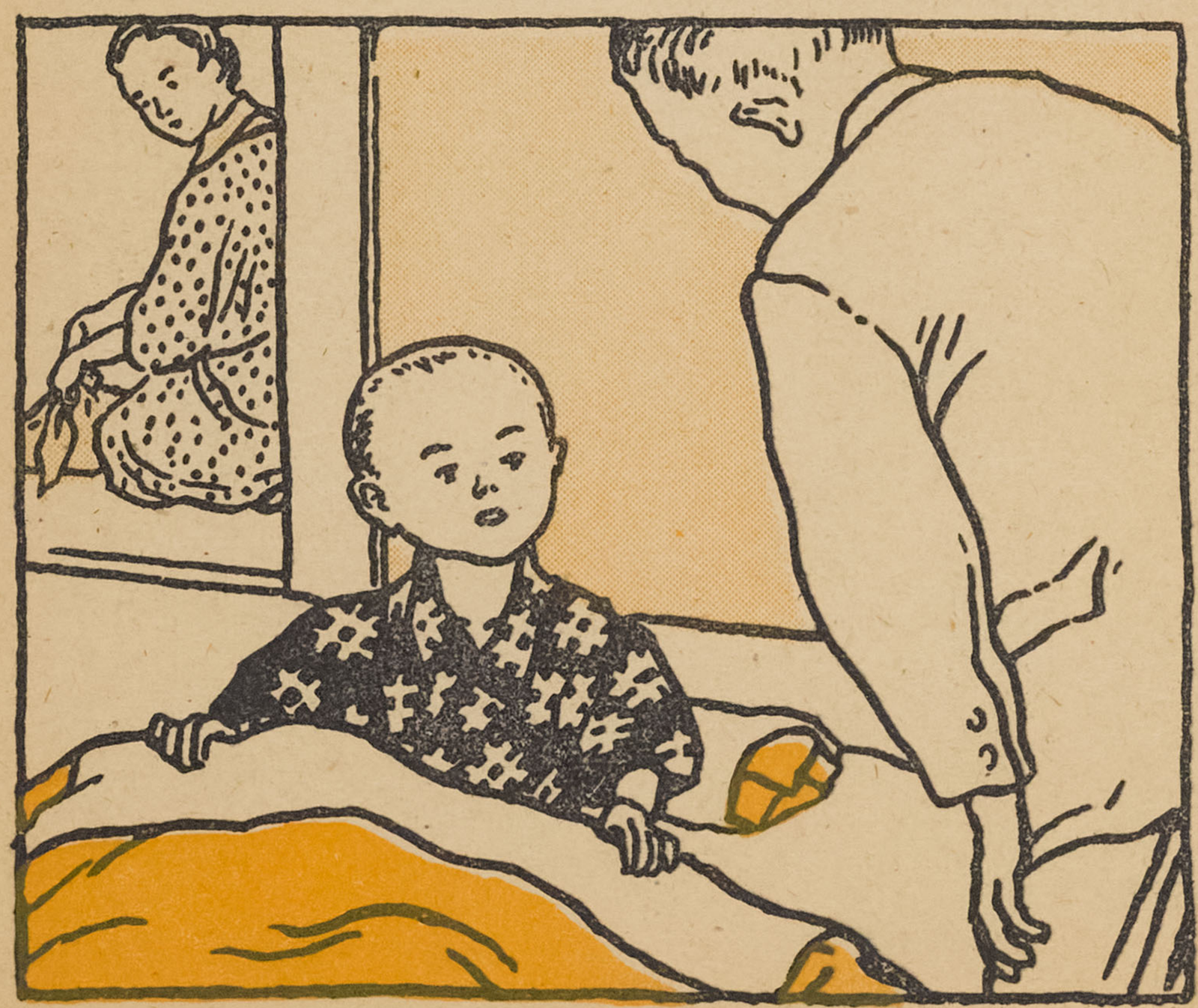
○

せんせいの　目の　なかに、
わたしが　いますよ。
みんなも　うごいて　いますよ。
木も　はえて　いますよ。
せんせいの　目の　なか、
ひろいな。

十八　お月さんの　くに

（二）

よなかに　目を　あけると、
おとうさんが　そばに　たって　いました。
「さあ、お月さんの　くにへ　いくんだよ。いそいで　でかけよう。」



「おかあさんは。」

と　ききますと、どこかで、

「たろうさん、わたし　おるすいよ。ふたりで　いって　いらっしゃい。」

と　いう　こえが　しました。

（二）

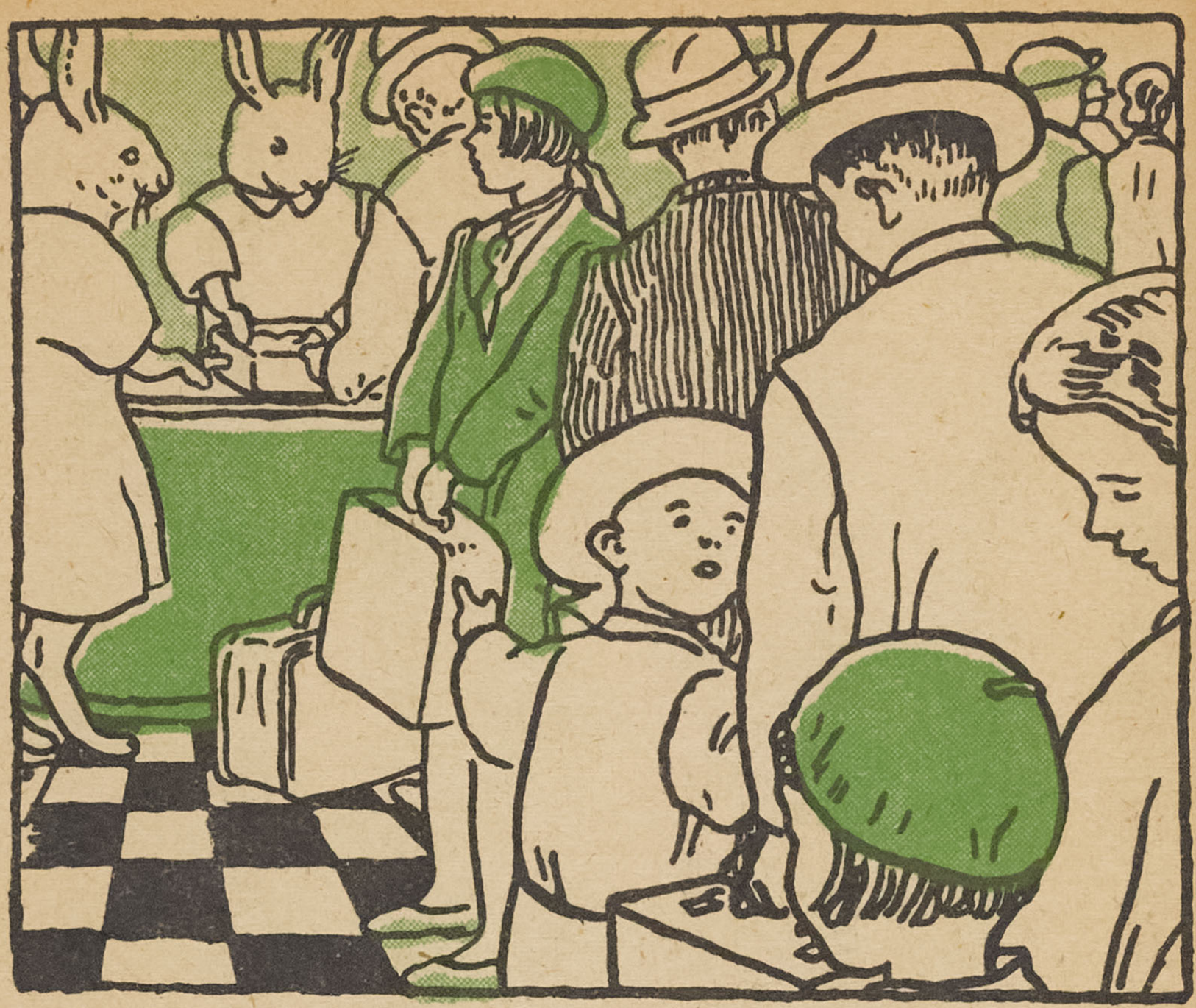
ふたりは　いそいで　えきに　いきました。

「お月さんの　くにへ　おいでの　かたは、こちらへ　おならびください。」

かくせいきが　よんで　います。

「げんさが　あるようですね。」

かくせいきが よんで います。



きものを きた おんなの ふりふり、もちものを しらべています。

「げんさが あるようですね。」

「もちものを しらべるのだ」よ。」

こんな こえが きこえます。

だんだん わたくしたちの ばんが ちかづきました。

へやの なかでは、しろい 人たちが、ながい みみを

かたなだの、てっぽうだの、あぶない　ものは　みんな
とりあげられて　しまいました。

（三）

わたくしたちの　ばんが　きました。
かばんを　あけて　なかを　みせますと、
「いいですよ。さあ、あちらの　へやへ　いらっしゃい。」
おんなの　人が　やさしく　いいました。
つぎの　へやで、こしを　かけて　まって　いますと、
おおきな　むしめがねを　もった　おじいさんが、やっぱり　ながい　みみを　ふり、ふり、わたくしたちを　よびま

した。

した。

おじいさんは、わたくしを

むしめがねで　のぞいて　み〃

ながら　いいました。

「これは　いい　おこさんだ。

げんきな　いい　おこさん〃

だ。」

そう　いって、おとうさん〃

の　もって　いた　四かくな

かみに、まるい　おおきな

り　ながい　みみを　ふりふり、わたくしたちを　よびま〃

はんを　おして　くれました。

（四）

きしゃが　きました。

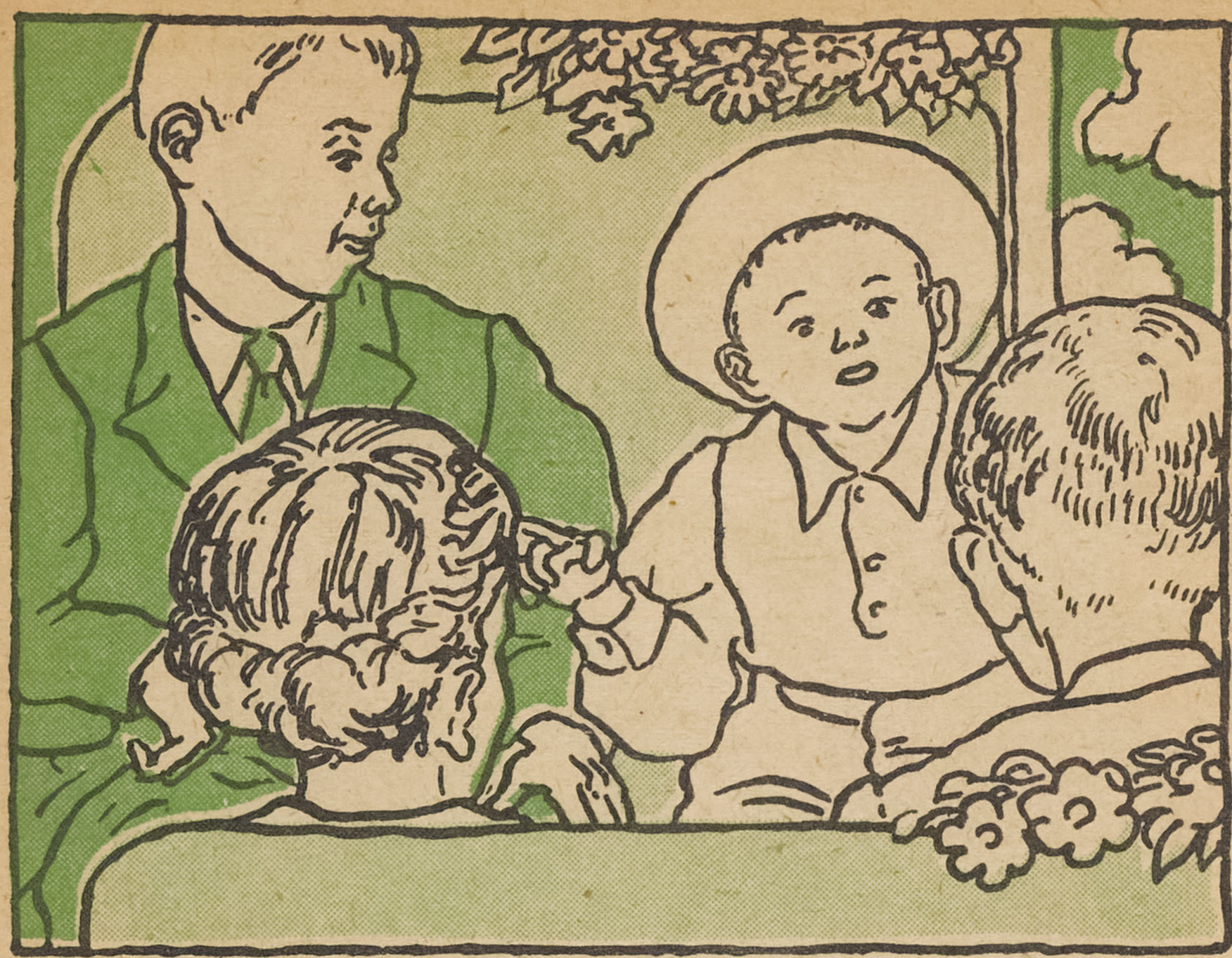
かくせいきの　こえが、　また　ひびきました。

「きしゃは　すいて　います。　ごじゅんに　ゆっくり　おのりください。」

おとうさんは、　うしろの　おきゃくさんの　にもつを　もって　あげました。　わたくしは、　おばあさんの　手を　とって　あげました。

よにんが　むきあって、　なかよく　こしを　かけました。

へやには、　きれいな　はな



よにんが　むきあって、なかよく　こしを　かけました。

へやには、きれいな　はな　が　かざって　ありました。

ぴいいっと、しゃしょうさんが　ふえを　ふきました。

きしゃは　すぐ　はっしゃしました。

（五）

きが　ついて　みると、さっきの　人たちも、しゃしょうさんたちも、ぽーいさんた

ちも、みんな　ながい　みみの　ある、あかい　目の　う〃
さぎさんでした。

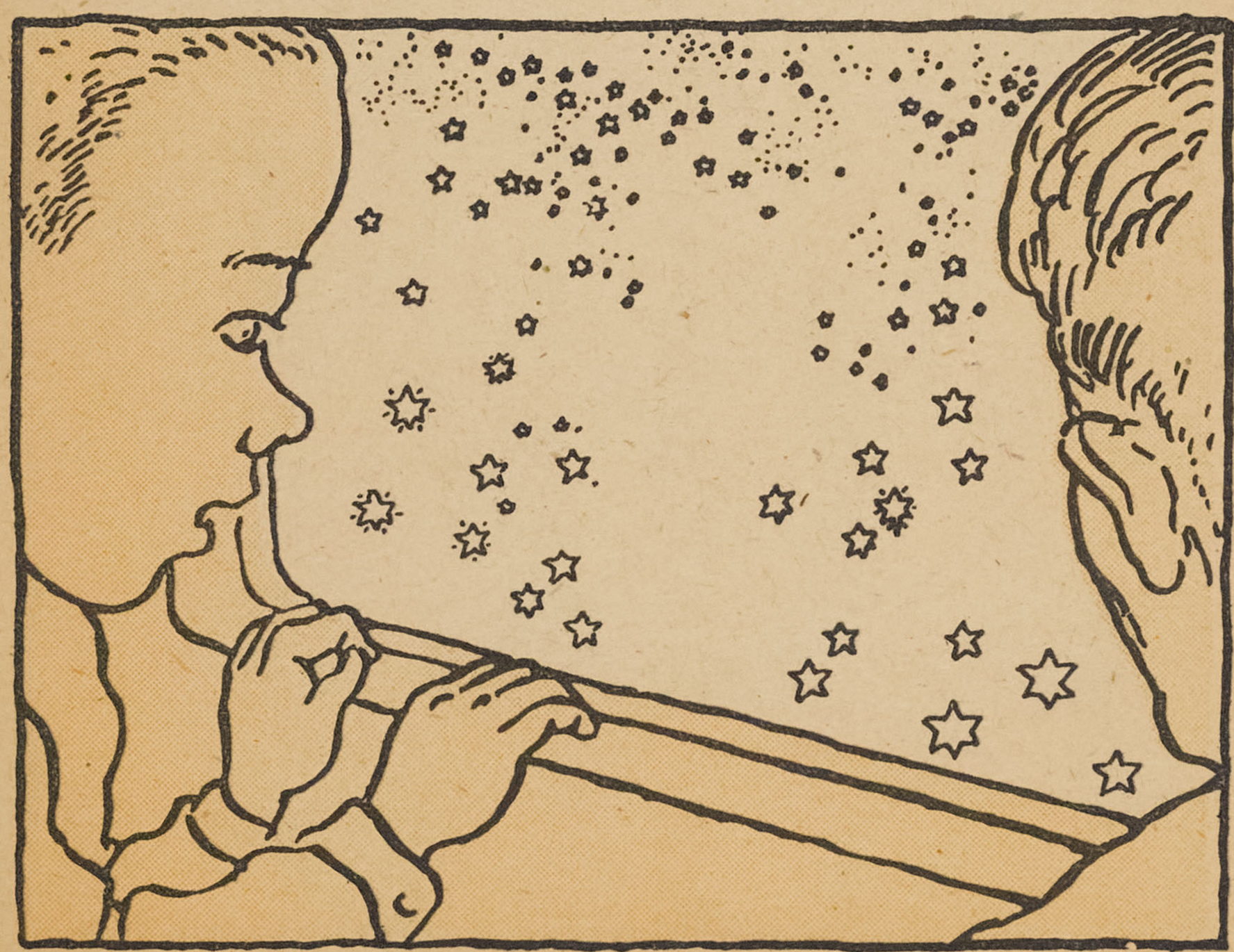
「なんだ、みんな　うさぎさんじ〃
ゃ　ないか。」
「やっと　きが　ついたの。お月〃
さんの　くにの　きしゃだもの。」
おとうさんも　おきゃくさんも、
みんな　わらいました。
しゃしょうさんが　まわって
きて　いいました。

「きしゃは、まもなく　くも〃

「きしゃは、まもなく くも」
の とんねるに はいります。
す。 みなさん、どうか ゆ」
っくり おやすみください。」
「さあ ねましょう。」
よにんは もたれあって、
ぐうぐうと ねて しまいま」
した。

（六）

すずしい かぜが ふきこ」



んで　きたので、目が　さめました。
もう　あさでした。
おおきな　川が　ながれて　いました。
「これは　なんと　いう　川だろう。」
ひとりごとを　いうと、となりの　おじさんが、
「これは　あまの川ですよ。そら、ところどころに、おお
きな　ほしが　ひかって　いるでしょう。」
おとうさんも　目を　あけました。
「かわらの　すなは、みんな　ちいさな　ほしみたいです
ね。」

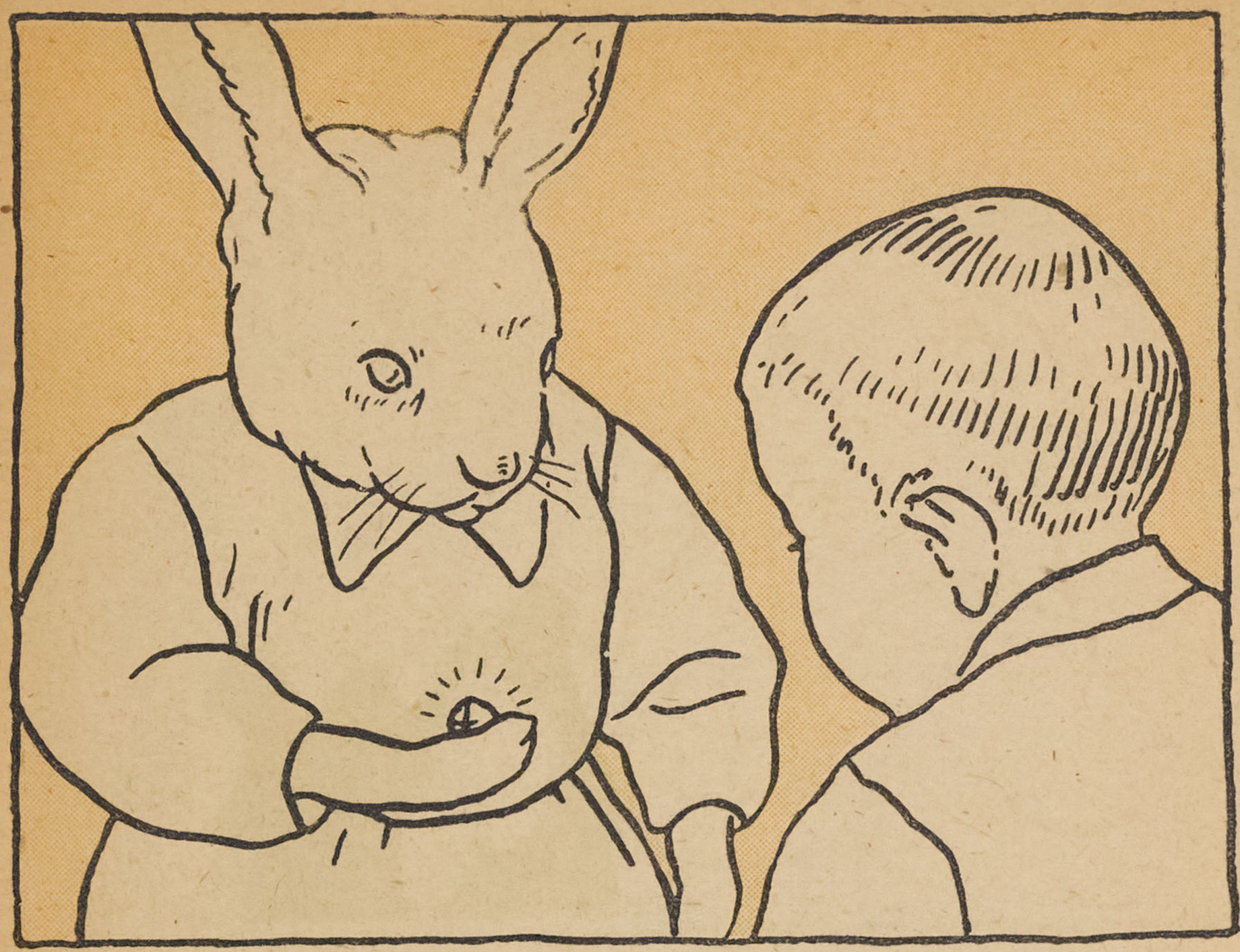
「あれは、みんな　だいやもんどですよ。」

「あれは、みんな　だいやもんどですよ。」
「ひとつ　ひろって　いって　おかあさんの　おみやげに
したいな。」
と、わたくしが　いった　とき、しゃしょうさんが　きま
した。

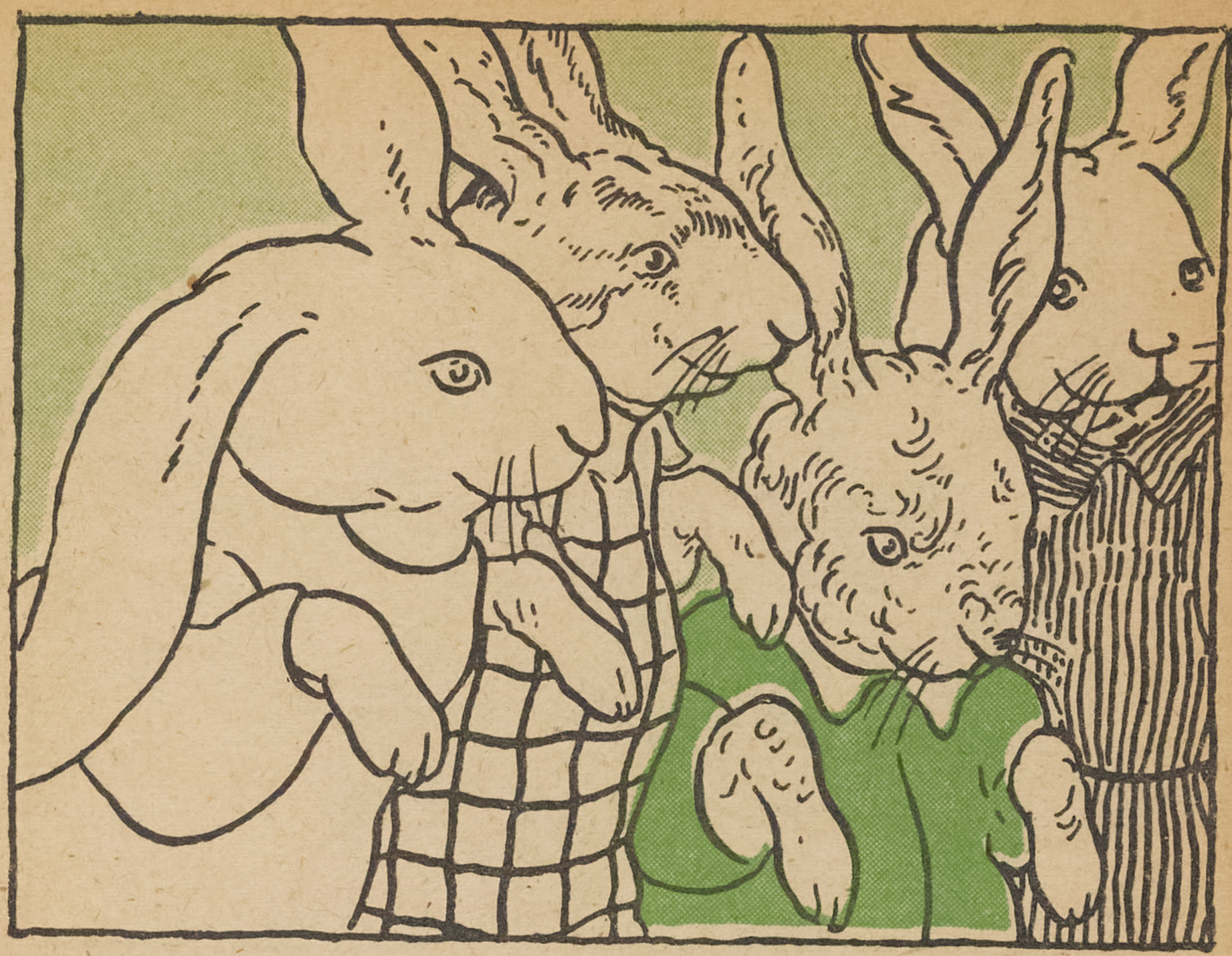
（七）

「あれは　ふしぎな　だいやもんどですよ。しんせつな
いい　人が　ひろうと、だいやもんどですが、いじの
わるい　けんかずきの　人が　ひろうと、ただの　いし
ころに　なって　しまいます。」

「しゃしょうさんは、ひろった　ことが　ありますか。」
「ええ、いくども　ひろいました。このお月さんの　くに　では、一ねんに　一ど　たまひろいに　このかわら　きます。そうして、たまが　ひろえたら、お月さんの　くにの　なかまに　いれて　もらえます。」
「ふうん。」
「たまが　ひろえなかったら、どう　なりますか。」
おとうさんが　ききました。
「そんなときには、はなれぼしに　ある　がっこうに　はいって、べんきょうして　くるのです。そうして、つ」



はいって、べんきょうして
くるのです。そうして、つ
ぎの としの たまひろい
で、きれいな たまが ひ
ろえたら、また お月さん
の くにへ いれて もら
えます。」
「あなたは その たまを
もって いますか。」
「ここに もって います。」
と いって、ぽけっとから
うずらの たまごほど ある



だいやもんどを　ひとつ　と‖
りだして、　わたくしに　みせ‖
ました。

（八）

おべんとうを　たべて、ち‖
と　うとうとうと　すると、
しゃは　もう　つ　いて　い‖
ました。　まどの　ところに、
おぼえの　ある　かおが、
たくさん　ならんで　いまし‖

た。

しろちゃん、はねちゃん、ぴょんちゃん、まきげちゃん、みんな　わたくしの　うちに　いた　きょうだいです。

きしゃから　かけおりて、手を　とりあいました。

「たろうさん、よく　いらっしゃいました。」

「みんな　げんきで　うれしいな。」

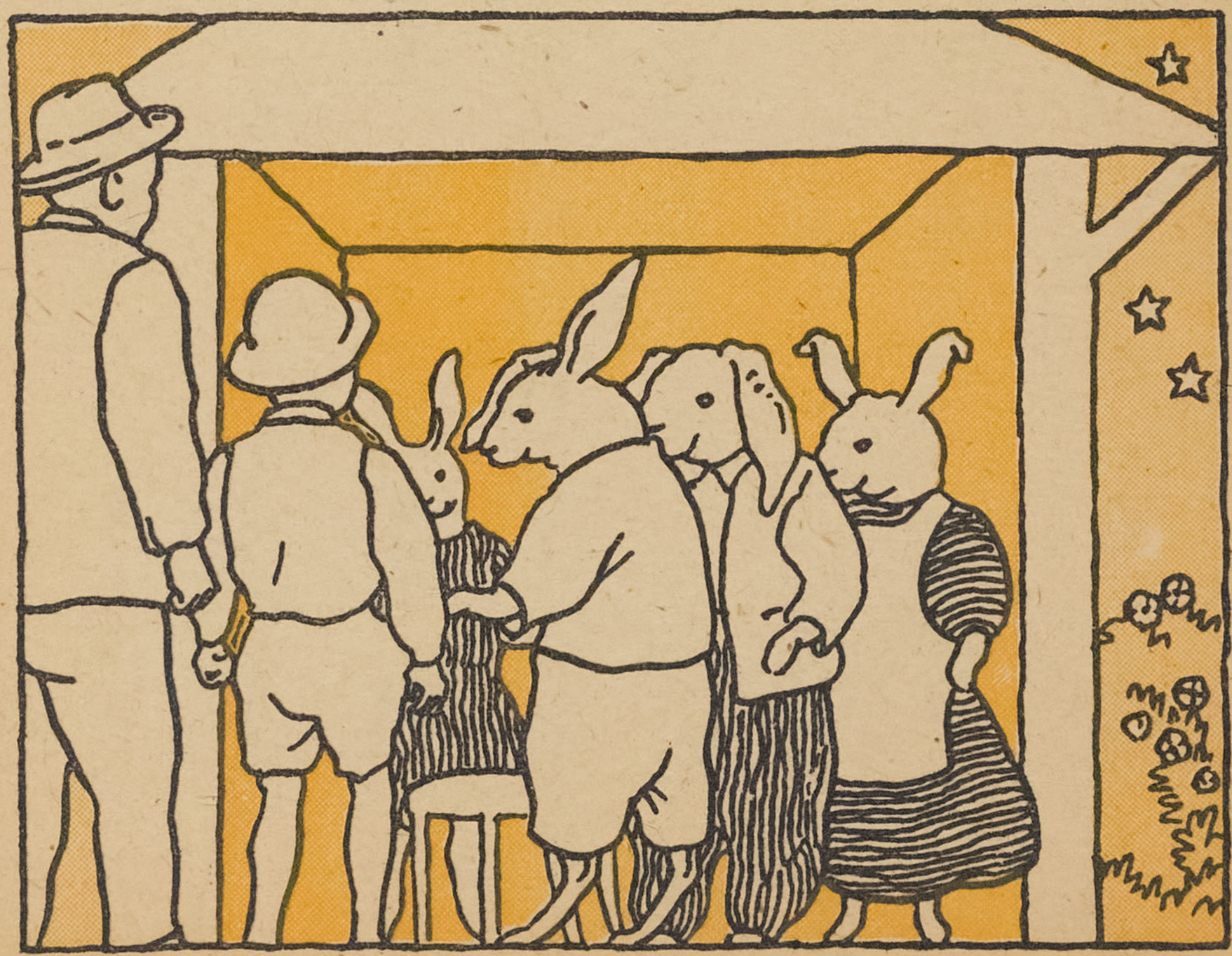
（九）

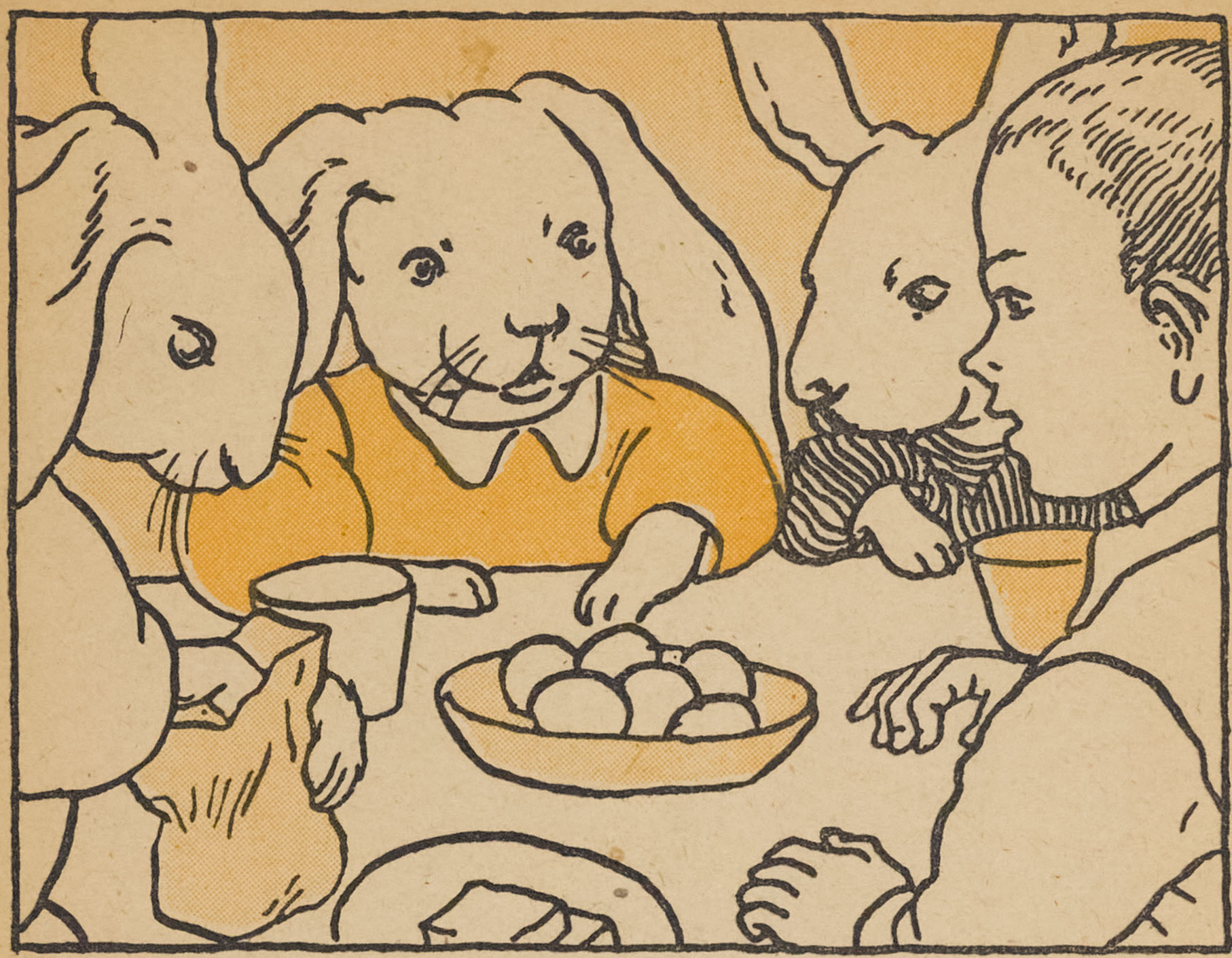
「やっぱり　おみみ　なおらないのね。」

わたくしは、かたほう　だらりと　さがった　しろちゃんの　みみを　みて　ききました。

「ありがとう　ございます。
あの　とき、　たろうさんが
くろいぬを　おって　くだ〃
さらなかったら、どう　な〃
って　いたか　わかりま せ〃
ん。あなたは　いのちの
おんじんです。」
と　いって、おれいを　い い〃
ました。
それから、そろって　しろ〃

ちゃんの　うち　へ　いきました





それから、そろって しろ〃ちゃんの うちへ いきました。

しろちゃんの うちは、つ〃きみそうの さいて いる おはなばたけの なかに あ〃りました。

おじいさんも、おばあさん〃も、きょうだいも、みんな よろこんで、めいぶつの お〃だんごや、おもちを、ごちそ〃

うして　くれました。

（十）

「あなたの　おうちに　おいて　いただいた　おかげで、しろちゃんは、げんきなこに　なりました。ぴょんち〃ゃんも、きれいずきなこに　なりました。はね〃ちゃんも、ものを　はっきり　いう　いいこに　なり〃ました。まきげちゃんも、おともだちと　なかの　いい、やさしい　こに　なりました。おかげさまです。」

と、おじいさんは　おれいを　いいました。

「それでは、みんな、あまの川で　だいやもんどを　ひろって　きたのですね。」

「それでは、みんな、あまの川で　だいやもんどを　ひろ〃
って　きたのですね。」
「たろうさん、よく　ごぞんじですね。　ここに　いる　も〃
のは、みんな、たまを　ひろった　なかまですよ。」
おじいさんが　こう　いうと、しろちゃんは　ふくろか〃
ら　だいやもんどを　とりだして、
「これを　たろうさんに　さしあげます。どうぞ　おかあ〃
さんの　おみやげに　して　ください。」
といいました。
「でも、わたくしが　もったら、ただの　いしころに　な〃
って　しまわないかしら。」

「どうして、たろうさん。あなたも、おとうさんも、おかあさんも、みんな いい人ですもの。どなたが おもちに なっても、たまは やっぱり たまですよ」。

といって、わたくしの 手に たまを おしつけました。

（十二）

よるになると、おどりが はじまりました。きゅうに あたりが あかるく なりました。でんとうでも ついたように のかと おもって みまわすと、山の うえから、おおきな お月さんが でる ところでした。

「おおきな お月さん。

と いいますと、

「おおきな　お月さん。」

と　いいますと、

「いいえ、あれは　たろうさ〃

んたちの　おくにですよ。

それで　あんなに　おおき〃

いのです。」

と、おじいさんが　いいました。

おんがくに　つれて、みん〃

なが　手を　とって　おどり〃

ました。おとうさんも、わた〃

くしも、わの　なかに　はいって、おはなばたけを　おど
りまわりました。　わたくしは、「みんな　いい　こ」を、おお
きな　こえで　うたいました。

「ああ、つかれた。ひとやすみ。」

わたくしは、そこに　あった　こしかけに　もたれて、
うとうと　しました。

（十二）

「まあ、たろうさんの　よく　ねて　いること。」

おかあさんの　こえで　目が　さめました。おもわず
ぽけっとを　さぐりました。

ぽけっとを　さぐりました。

といって、おかあさんは、だきあげて　くれました。

「まあ、おかしな　人。どうかしたの。」

「あまの川の　だいやもんど、おかあさんの　おみやげにいただいたの。」

「だいやもんど。それなら、あゝなたの　目の　なかに　ふたつ　ひかって　いますよ。」

わたくしを　ひざの　うえに

な	た	さ	か	あ
に	ち	し	き	い
ぬ	つ	す	く	う
ね	て	せ	け	え
の	と	そ	こ	お

ぱ	ば	だ	ざ	が	きゃ	しゃ	ちゃ	にゃ
ぴ	び	ぢ	じ	ぎ	きゅ	しゅ	ちゅ	にゅ
ぷ	ぶ	づ	ず	ぐ	きょ	しょ	ちょ	にょ
ぺ	べ	で	ぜ	げ				
ぽ	ぼ	ど	ぞ	ご				

ん	わ	ら	や	ま	は
	ゐ	り	い	み	ひ
	う	る	ゆ	む	ふ
	ゑ	れ	え	め	へ
	を	ろ	よ	も	ほ

ぴゃ	びゃ	ちゃ	じゃ	ぎゃ	りゃ	みゃ	ひゃ
ぴゅ	びゅ	ちゅ	じゅ	ぎゅ	りゅ	みゅ	ひゅ
ぴょ	びょ	ちょ	じょ	ぎょ	りょ	みょ	ひょ

78468

一 (4)
二 (6)
三 (8)
四 (9)
十 (11)
五 (12)
六 (14)
七 (15)
八 (17)
九 (18)
人 (25)
目 (27)
口 (27)
手 (29)
足 (29)
日 (31)
木 (36)
川 (37)
月 (39)
山 (40)

国立国語研究所
1000603520

こくご　一　　第一学年前期用

Approved by Ministry of Education
(Date Feb. 20, 1947)

昭和二十二年二月二十日　翻刻印刷
昭和二十二年三月十五日　翻刻發行
〔昭和二十二年二月二十日　文部省檢査濟〕

著作權所有

著作兼發行者　文部省
東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞
東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式會社
東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
發行所　東京書籍株式會社

X160.0
Mo 24
(1-前)
00603520